

1950～60年代の内モンゴルにおける自流入移民問題

仁欽

(内蒙古大学 蒙古学研究中心, 内蒙古 呼和浩特 010021)

摘要:1950～60年代、山東省、河北省などの地域の数多くの農村人口は、自然災害などの要因により自発的にほかの地域へ移出した。これらの自発的に移出した人口の多くは、内モンゴル、新疆、青海などの辺境少数民族地域へ流れ込んだ。このような自流入移民の問題は、現代中国の人口問題研究の重要課題のみならず、現代中国の民族問題研究の欠かせない課題にもなるのである。しかし、この時期の辺境少数民族地域における自流入移民の問題に関する研究は、管見の限りでは趙入坤「二十世紀五六十年代中国辺疆移民」しか見当たらない。

本稿の狙いは、以下のいくつかの問題をあきらかにすることにある。内モンゴルにおける自流入移民はどのような特徴をもつか、自流入移民の内モンゴルへの移入の要因はなにか、自流入移民はどのような動機と認識および心境で内モンゴルへ移入したのか、内モンゴルに移入した自流入移民は如何に安置されたのか、自流入移民の移入によりどのような社会問題が生じ、内モンゴル地域社会にどのような影響がもたされたのか。

关键词: 1950～60年代; 内モンゴル; 自流入移民問題

中图分类号: K28

文献标识码: A

1950～60年代、山東省、河北省などの地域の数多くの農村人口は、自然災害などの要因により自発的にほかの地域へ移出した。これらの自発的に移出した人口の多くは、内モンゴル、新疆、青海などの辺境少数民族地域へ流れ込んだ。このような自流入移民の問題は、現代中国の人口問題研究の重要課題のみならず、現代中国の民族問題研究の欠かせない課題にもなるのである。しかし、この時期の辺境少数民族地域における自流入移民の問題に関する研究は、管見の限りでは趙入坤「二十世紀五六十年代中国辺疆移民」[\[1\]](#)しか見当たらない。

本稿では、1950～60年代の辺境少数民族地域における自流入移民問題について、研究対象を内モンゴルにしばって考察をおこなう。考察にあたっては、主に公安部・内務部党組「關於堅持制止人口自由流動向中央的報告」(1961年10月14日)内蒙古档案馆 255-2-79、「労働部党組的報告」(1959年2月7日)内蒙古档案馆 255-2-49、「内蒙古党委關於開展清理区外人員工作的指示」(1960年7月21日)内蒙古档案馆 255-2-53など、従来の研究者によって使用されたことのない文書史料を使用し検証する。その狙いは、以下のいくつかの問題をあきらかにすることにある。

内モンゴルにおける自流入移民はどのような特徴をもつか、自流入移民の内モンゴルへの移入の要因はなにか、自流入移民はどのような動機と認識および心境で内モンゴルへ移入したのか、内モンゴルに移入した自流入移民は如何に安置されたのか、自流入移民の移入によりどのような社会問題が生じ、内モンゴル地域社会にどのような影響がもたされたのか。

一、内モンゴルにおける自流入移民の特徴

1950～60年代、山東省、河北省などの地域の数多くの農村人口は自発的にほかの地域へ移出

した。統計によれば、1958 年後半から 1959 年 2 月までの間、山東省、河北省などの 11 の省から自発的にほかの地域へ移出した人口は 120 万人に達した。[2] 1959 年 12 月から 1960 年 5 月までの期間に河北、山東、江蘇、河南、湖北などの省から自発的に移出した人口は、各省 10 万人を超える。[2] これらの自発的に移出した人口の多くは、内モンゴル、新疆、青海などの辺境少数民族地域へ流れ込んだ。実例をあげれば、1958 年後半から 1959 年 2 月までに期間に山東省、安徽省、江蘇省、河南省から自発的に移出し、内モンゴル、青海省などの地域へ流れ込んだ人口は 60～70 万人にのぼった。[2] 1960 年 1～3 月の間に、内モンゴルへ流れ込んだ自発的移民は 26 万 9000 人であり、新疆へ流れ込んだ自流移民は 20 万人余りであり、甘肅へ流れ込んだ自流移民は 60 万人であった。[3]

内モンゴルの場合、1954 年冬から 1955 年 6 月までの期間にジリム盟に自治区以外の地域から流れ込んだ自流移民は 2 万 5000 人あまりであった。[4] 1955 年 8 月の統計によれば、喜貴図旗（現在内モンゴルの牙克石市）に全国 19 省の 100 あまりの県の地域から流れ込んだ自流移民は 8500 人あまりであった。[5] 1954 年秋から 1955 年夏までの期間に山東、河南、河北、熱河省、遼寧、黒龍江省などの 6 の省からフルンボイル盟に移入した自流移民は 4 万 1812 人であった。[6]

ここで指摘しておきたいのは、中国では、1956 年に実施された辺境地域への開墾型の移民は、政府の指導のもとで計画的、組織的におこなわれたということである。同年に内モンゴルには、河北省、山西省などの地域から集団的な移民 1 万 7237 人、青年墾荒隊員 2442 人、合計 1 万 9679 人が移住を指示された。そのうち、河北省からの開墾型移民は 1 万 7184 人であり、全体の 87.32% を占め、山西省からの開墾型移民は 1317 人であり、全体の 6.69% を占め、陝西省からの開墾型移民は 1178 人であり、全体の 19.29% をしめていた。[7]

しかし、1957 年 6 月の時点になると、上記の組織的、計画的な開墾型の移民 1 万 9679 人のうち、19.29% にあたる 3797 人は移出元の地域へ帰還した。とくに、フルンボイル盟においては移入した 2300 人のうち、66.70% にあたる 1534 人が移出元の地域へ帰還している。[7]

上述のように、政府の組織、計画のもとでの数多くの移民が移出元の地域へ帰還したことにより、1957 年の秋から内モンゴル政府は移民安置の重点を自発的に流入した人口移したのである。1957 年 7 月から 1960 年までの 3 年間に、内モンゴルでは、全国各地から移入した 87 万 2644 人の自流移民が安置された。[7]

内モンゴルに安置された自流移民を移出元別にみると、河北省は 34 万 8579 人であり、全体の 39.95% を占め、山西省は 11 万 4772 人であり、全体の 13.15% を占め、山東省は 11 万 4618 人であり、全体の 13.13% を占めている。遼寧省は 8 万 9751 人であり、全体の 10.28% を占め、吉林省は 2 万 5250 人であり、全体の 2.89% を占めている。江蘇省は 1 万人 5207 人であり、全体の 1.74% を占め、甘肅省は 1 万 2488 人、陝西省は 1 万 1256 人で、それぞれ全体の 1.34%、1.29% を占め、そのほかの地域は 5 万 7322 人であり、全体の 6.57% を占める結果となっている。[7]

内モンゴルに安置された自流移民を年代別にみると、1957 年後半に 3 万 9182 人が安置され、1958 年に 9 万 4784 人、1959 年に 13 万 4697 人、1960 年前半に 60 万 3981 人であった。[8] そのうち、1960 年 8 月～1961 年 2 月の間に甘肅省の 2 万 9000 人の自流移民は内モンゴルのバヤンノール盟に流れ込み、1960 年 1 月～1961 年 2 月の間に自治区外地域の自流移民 1 万 7405 人はジョーオダ盟に流れ込み、1961 年 3～5 月の間に東北各省と中原地域の数多くの自流移民はジリム盟に流れ込み、通遼市のみで 900 人にのぼった。[9]

上述の内容から内モンゴルに流入した自流移民について次のような特徴が分かる。

第一に、自流移民の移出元の地域のなかで、内モンゴルに隣接する各省の中でもっとも多か

ったのは河北省である。また、隣接する省以外では山東省が最大であった。

第二に、移入した自流移民の人口は、すでに一部の地域総人口の中で一定の割合を占めるようになった。例えば、1960～1961年3月の間にアルホルチン旗の白音漢人民公社に移入した自流移民は197戸、1747人であり、総戸数の15.7%を占め、総人口の9.2%を占めている。^[6]

第三に、移入した者の圧倒的多数の者は、自然災害の被害を受けた者である。階級区分からみると、貧農と中農が圧倒的多数を占めている。実例を挙げれば、ホルチン右翼前旗の調査によれば、移入した自流移民2859戸のうち、貧農と中農は総戸数92.1%（うち、貧農は76.1%、中農は16%を占める）を占め、地主と富農は総戸数の3.3%を占めるのみである。なお、身分不明者は総戸数の4.1%を占める。^[6]

第四に、移入類型からみると、農村地域の過剰労働力型と家族の全体構成員あるいは家族の2分の1構成員の型に分けられる。内モンゴルに移入した山西省忻県の自流移民を例にすれば、前者は151戸、425人であり、全体の37%を占め、後者は309戸、183人であり、全体の63%を占めている。^[10]

二、自流移民の内モンゴルへの移入の背景と要因及び認識

（一）自流移民の内モンゴルへ移入の背景

少数民族地域のなかでも、内モンゴルは漢人の移民の受け皿となった最も長い歴史をもつ。すなわち、中原地域（中国黄河中流から下流にかけての漢人居住地域を指す）の漢人農民の自発的な内モンゴルへの入植自体は、すでに清朝初期から「走西口」「闖関東」などのさまざまな形でおこなわれていた。^①

中華人民共和国成立後の1950年代の半ばから1960年代の初めまでの期間の河北省、山東省、河南省などの地域の自流移民の内モンゴルへの移入には、次のような背景があったと考えられる。

第一に、義務供出制度の導入による食糧危機の発生。中国における土地改革（1947～52年）がほぼ完了したとともに、農民の穀物販売量が急激に減少した。その一方、工業化の進展による都市人口の急激な増加につれて、都市の商品化食糧（穀物）需要量が増大した。そして、穀物の供給量は政府の穀物掌握量を超え、政府の穀物の手持量は減少するばかりだった。政府はこのような状況をのりこえるために、1953年11月に義務供出制度を導入せざるをえなかった。しかし、この制度の導入ののち、1954年から農村での食糧危機、1956年から都市での食糧危機が発生した。

第二に、いわゆる「三面紅旗」による経済建設の失敗で発生した混乱と大飢饉。中国で1958年から実施された「社会主義建設の総路線」「大躍進」「人民公社」のいわゆる「三面紅旗」政策は、中国の政治、経済、社会、軍事、対外関係、文化、教育などの諸領域にわたって深刻な影響を与えた。経済建設では混乱と大飢饉がもたらされ、数多くの餓死者が出た。^②

第三に、山東省、河北省などの地域において発生した自然災害がより深刻であった。

例えば、1960年には、全国の広い範囲が干ばつ災害の被害を受けた。そのうち最も被害の深刻だった地域である河北省、山東省、山西省では耕地面積の60%以上が被害を受けたことは、よく知られている事実である。

第四に、内モンゴルの場合、「大躍進」運動期間にも自然災害を受けたが、ほかの地域のように深刻ではなく、餓死者が出るほどではなかった。逆に1960、1961、1962年にそれぞれ1.37億kg、59.5億kg、0.42億kgの食糧が、内モンゴルからほかの地域へ搬送された。^[11]

（二）自流通移民が内モンゴルへの移入の際に持っていた認識

自流通移民は、なぜ内モンゴルへ移入したのか、彼らの目的は何か、かれらは内モンゴルへ移入したことについてどのような考えをもっていたのか、かれらの心境はどうだったのか、以下は、事例をあげて、これらの問題を考察する

1. 山西省忻県の自流通移民の事例

1955 年、山西省忻県地域委員会の幹部 13 人により構成された工作組によって、内モンゴルの集寧、武東、武川、固陽、安北、五原の 6 の県とチャハル右翼中旗、チャハル中後連合旗および包頭市の 24 の郷に移入した山西省忻県の 1834 戸、3806 人の自流通移民を対象とする調査がおこなわれた。調査を通じて、以下のいくつかのことがわかった。

自流通移民の内モンゴルへ移入の最も普遍的な原因は、①移出元の地域では種、飼料などの生産用品が不足し、食料も足りなかったこと；②貧農と手工業労働者の場合、耕地が少ない、労働力の過剰；③一部の地主や富農の場合、監督と改造を回避することにあった。^[10]

自流通移民が内モンゴルへ移入した目的からみると、一部の者は「内モンゴルには労働力は足りない、賃金が高い」との認識から、金をもうけるためであった。また、一部の者は「移出元において供給された食糧の量は少ない」。そのため「少ない量の食糧を家族に残し、家族の生活を維持し、生産を営むことができるようにする」ためであった。^[10]

他方では、移出した自流通移民の考えや心境からみると、農民、とくに中農は、食糧の義務供出制度、協同組合化の活動に不満であった。かれらは「一部の地域では、食糧の徴収量は多すぎであり、食糧の提供制度が整備されたとしても、その供給は足りず、供給も不合理である」「協同組合化の過程においても、等価の原則が十分に貫徹されず、中農の利益が侵害されたことも生じた」と認識していた。また、一部の山岳地域の農民は「山岳地域での生産活動に専念せず、ほかの地域へ行き、金持ちになる」といった考えをもっていた。^[10]

2. 喜貴図旗林業地域の自流通移民の事例

すでに述べてきたように、1955 年 8 月の統計では、喜貴図旗の林業地域には全国の 19 の省の地域から 8500 人の自流通農民が移入した。かれらが喜貴図旗の林業地域に移入したことについては、次のような要因、目的が存在していた。一部の者は、自然災害の被害を受け、生活が困難になったことにより、林業地域へ行き、良い生活を送るためであった。別の者は、もともとの生活はよかったが、「林業地域の生活はより豊かといった話を聞き、行くようになった」と述べている。また、一部の退役軍人は「林業地域へ行き、林業地域の政府に仕事を要求するためだった」ということであった。^[12]

3. ジョーオダ盟の自流通移民の事例

ジョーオダ盟に移入した 1 万 7405 人を例にすれば「移出元の地域では深刻な自然災害の被害を受けたため、移出した」ということが移入の主な原因であった。一部の者については「親戚や友人についてきた」という理由であった。また、一部の者は、移出元の実産に専念せず、「どこか生活の良い場所があれば、どこへでも行く」考えであった。^[13]

上記の事例からは、まず、自流通移民の内モンゴルへ移入には、次のようないくつかの原因が分かる。①移出元においての実産基盤の不足により、正常な生産が悪影響を受けたこと。②自然災害の影響で生活が困難になったこと。③移出元においては、耕地が少なく、労働力が過剰であったこと。

次に、自流移民が内モンゴルへ移入した動機については、少ない食料を移出元の家族に譲り、家族の正常な生活を確保するためであったこと、内モンゴルの賃金が高いと認識していたこと、より良い職業につくためであったことなどがあげられる。

最後に、自流移民は食糧の義務供出制度、協同組合化の活動に不満であったり、移出元の生産と生活に満足せず、内モンゴルへ行き、豊かになるという考えを持っていた。

三、内モンゴルにおける自流移民の安置

内モンゴルの各級の政府は、自流移民の安置を重視していた。実例をあげれば、ジリム盟党委の指示のなかでは、自流移民の安置の意義について次のように強調された。「自流移民を安置することは、経済的活動のみではなく、政治的な活動であり、さらに食糧を増産させて食糧の不足の問題を解決する重要な方法である。とくに、ジリム盟の場合、耕地が広い一方で、労働力が少ない。移入する労働力を組織して農業生産に従事させれば、耕地の面積の拡大や食糧の増産に重要な意義をもつのである」。^[14] 実際上の自流移民の安置活動がどのようにおこなわれたのかについて、実例をあげてみたい。

ジリム盟の場合、まず、移入した自流移民の耕地、家屋、農具などの生産基盤の状況と生活状況を把握した。次に、各地域の実際状況にもとづき、耕地問題の解決の際に民族間の団結を原則とし、移入地域の大衆の放牧に影響を与えないとの前提で一部の放牧地を開墾し、移入してきた自流移民に耕作させた。また、一部の移入自流移民を協同組合に加入させ、彼らに対し互助の原則のもとで農具のない者に農具を提供した。さらに、生活の困難な者に資金を貸し出すか、または社会救済をおこなった。^[14]

フルンボイル盟の阿榮旗の場合、自流移民を安置することにあたっては、主に大衆を動員し、自流移民に対する援助をおこなった。地元の大衆は自流移民に対し、合計525kgの食糧、1万3090kgの種、3万4900kgのジャガイモの援助をおこなった。同時に政府も自流移民に対し3895元を貸し出し、3000元の救済をおこない、1514垧（垧＝15畝）と1077部屋を提供する扶助がおこなわれた。^[6] また「安置された自流移民を農業生産に従事させる」方針のもとで、1560戸の自流移民のうち74.6%を占める1164戸の者を農業生産に従事させ、17%に当たる267戸のものを副業生産に従事させ残りの129戸の者を臨時的な仕事に従事させた。^[6]

フルンボイル盟の額爾古納旗の場合、山東省から額爾古納旗に移入した自流移民の508戸、2403人のうち、回族は421戸、1964人であった。したがって、地元の幹部や大衆に対する民族政策と民族間の団結の教育が実施された。実際の安置活動においても、回族の風俗習慣を考慮し、回族を同一地域に居住させる原則がとられた。^[6] 生産基盤や物資の分配上において、地元政府は山東省から移入してきた自流移民に耕畜用の役馬317匹、耕畜用の牛537頭および必要な飼料とそのほかの生産物資を貸し出した。また、食糧、家具なども提供された。^[6]

山西省忻県の調査団の調査によれば、地元政府は、山西省忻県から内モンゴルの6の県、2の旗、1の市、24の郷の移入した151戸の農民に2911畝の耕地、1戸当たり19畝の耕地を提供した。^[10]

四、自流移民の移入によりもたらされた問題とその影響

自流移民により、さまざまな社会問題が引き起こされた。中国全体からみると、内務部の1959年2月7日の報告によれば、自流移民の移出は移出元の地域の生産建設に大きな影響を与えたところがある。例えば、ある地域では人民公社の半分の労働力が移出したことにより、農業耕作の任務が完成されなかったという。そのほか、一部の自流移民は移入地域の企業に採用されても、移出元

の政府が自流移民の戸籍などの転出を許可しなかったり、または採用されなかった自流移民は移入地域の社会秩序に悪影響をもたらしたという。[2]

公安部、内務部党组の1961年10月14日の報告によれば、自流移民の問題は生産と社会治安に次のような影響をもたらしていた。

①労働力の浪費。調査によれば、自流移民の中で16～50歳の者が60～70%を占めることにより、移出元の農業生産に悪影響をもたらした。

②時流移民が交通手段を利用して、運輸物資の強奪などを行うことにより、交通、運輸の秩序が乱された。

③自流移民は都市部へ流入しても就職できず、さらに強盗などの事件を起こしたことにより、都市部の正常な秩序が破壊された。

④少数の反革命分子、労働改造分子が自流移民のなかに混入したことにより、各地域において生じた刑事事件の犯人の多くは、反革命分子、労働改造分子であった。[15]

それでは内モンゴルの場合には、自流移民の移入によって地域社会にどのような問題や影響がもたらされたのかみてみよう。

（一）さまざまな事件の発生

まず、自流移民の自然死に非ざる死亡事件が多数生じた。内モンゴル党委の報告によれば、1960年12月から1961年1月の間に内モンゴルに移入した自流移民のうち39人は自然死ではない形で死亡した。地域的にみると、バヤンノール盟のアラشان旗においては23人、エジナ旗においては5人、包頭市においては11人であった。これらの死亡者の多くは、農村で就職せず、勧告も聞かずに移動していた過程で凍死、餓死、病死した。またごく少数の者は、犯罪を犯して自殺した。[16]

次に、強盗、殺人などのさまざまな事件が発生した。統計によれば、1961年1～5月の間に、ジリム盟においては強盗、殺人など461件の事件が発生し、前年同期比の3倍に増加した。これらの事件の大多数は移入してきた自流移民の起こしたものである。[17]同様に、統計によれば、1960年8月～1961年1月の間、甘粛省民勤などの地域からバヤンノールに2万9000人の自流移民が移入した。これらの移民のなかの一部の者は、数人規模の集団的な強盗をおこない、地元の者の家畜、食糧、服装などを盗んでいた。1961年1月時点でのアラشان旗の不完全な統計によると、165件の強盗事件が発生し、200頭余り馬の家畜が盗まれ屠殺された。フフホト、包頭の場合、様々な事件の70%は、移入した自流移民が犯したものであった。[18]これらの事件は、牧畜業生産破壊しただけではなく、牧民大衆の日常生活と生産に不安をもたらしたのである。

（二）深刻な人口問題

次に、内モンゴルの人口の推移と漢人の移民との関連を検証してみよう。1957年に936.0万人であった内モンゴルの人口は、1960年に1191.1万人に達している。つまり3年間で225.1万人増加し、平均して毎年85万人増えたことになる。年別にみると、1958年に50.1万人（前年比増加率5.35%）、1959年に76.4万人（同7.75%）、1960年に128.6万人（同12.10%）それぞれ増加している。そのうち、移入による増加人口は1958年に30.4万人（総増加人口に占める比率は60.7%）、1959年に56.1万人（同73.4%）、1960年には106.1万人（同82.5）であった。一方、自然増加人口は、1958年は19.7万人（総増加人口に占める比率は39.3%）、1959年は20.2万人（同26.6%）、1960年は22.5万人（17.5%）に過ぎなかった。[19]

要するに、1958～1960年の3年間に人口は急激に増加しているが、その増加分の人口の絶対多数を占めたのが移入人口（192.66万人、増加総人口全体の75.52%）であったことは明らかである。この移入人口は、中国全体の少数民族地域のなかでも最大であった。たとえば、漢人の入植が激しかった新疆の1959年の場合でもその規模が10万人を超えたにすぎなかった[20]のと比較すると、内モンゴルへの移入規模がいかに大きかったかがわかる。

1957年7月後半から1960年6月までの間に、河北、山西など13の省・地域から流れ込んできた87万2644人の自流移民が内モンゴルの各地に移入された。[21]これらの流れ込んできた自流移民のうち46.77%、すなわちほぼ半数が農業に従事していた。そのため、内モンゴルの農業人口は急激に増加した。なかでも人口の増加がもっとも著しかったのは牧畜業地域である。1957年と1960年の牧畜業地域全体の人口を比べてみると、1960年は1957年よりも55.22%増加している。[22]一つの例としてシリングル盟に注目してみると、農業人口は8万9040人（1958年）から14万683人（1960年）になり、58%も増加した。[23]また、内モンゴル全体からみても、農業人口は1956年の696.3万人から1960年の774.3万人になり、81万人増えた。[24]

上述のような牧畜業地域における農業人口の過度の急激な増加がもたらした影響は決して少なくない。そのなかで、もっとも深刻であったのは次のような影響だったことを指摘することができる。[25]

(a) 当該地域の食糧供給の負担が増大した。たとえば、食糧供給の増大について、シリングル盟を例にすれば、食料の供給量は1957年の3786.5万kgから1965年の5132.5万kgまでに増えた。[26]

(b) 生活用具・生産手段の平均的な分配が推進された。すなわち、先住民であるモンゴル人の持っていた生活用具・生産手段を、もとの持ち主であるモンゴル人と入植者である漢人とに平均的に分配した。つまり、モンゴル人の側から見れば、この分配によって生活用具・生産手段が減少したのである。

(c) 農業生産隊と牧畜業生産隊の収益についても平均分配が実施された。牧畜業地域において、その土地が農業に適するかどうかなどの自然条件を無視して大いに耕作を行なった結果、農業生産隊の収益は極めて少ないものであった。そこで、農業生産隊の収益と牧畜業生産隊の収益との平均分配がおこなわれた。すなわち、農業生産隊の少ない収益を牧畜業生産隊の収益が補う形となり、牧畜業生産隊のモンゴル人牧民にとっては収益が減少することになった。

(d) こういった生活用具・生産手段、生産隊の収益の分配は、先住民であるモンゴル人と合意したうえでのことでなく、人民公社からの指示で強制的に進められたものである。

(三) 放牧地開墾の問題とその結果

移入してきた数多くの農民は耕地を必要とし、そのことが過度の放牧地開墾を促したのである。放牧地が如何に開墾されたかについて、いくつかの代表的事例を挙げながら検討してみたい。

1. フルンボイル盟の牧畜業4旗の事例

フルンボイル盟は牧畜業が盛んにおこなわれてきた地域である。盟の面積は3.8億畝（25.3万km²）で、内モンゴル自治区総面積の22.2%を占める。そのうち、天然の草原の面積は1.69億畝で、全盟の土地面積の45.5%を占め、自治区全体の草原総面積の14.4%に相当する。特に、牧畜業4旗（エヴェンキ族自治旗、新バルガ右旗、新バルガ左旗、ホーチンバルガ旗）の天然の草原の面積はフルンボイル盟の草原総面積の74%を占め、家畜頭数は盟の家畜総数の71%に当た

り、純粹の牧畜業をいとなむ地域であった。しかし、「大躍進」運動においては、このような自然環境や経済状況が無視され、1961年の1年間だけで、牧畜業4旗で開墾された面積は300万畝あまりにのぼった。[27]

2. 国营農場・国营牧場の事例

内モンゴル最初の国营農場は胡力海農場（ジリム盟）で、これは国共内戦期の軍事的需要を満たすために1948年3月に遼寧省軍区後勤部により建設されたものである。その後、1952年までに花都什農場（ジョオオダ盟）、那吉屯農場（フルンボイル盟）など8つの農場がつくられた。続く第1次五ヵ年計画の期間（1953～1957）に上海廟農場（イフジョー盟）、察汗陶海農場（バヤンノール盟）などの11の農場が新たに生まれ、内モンゴル地域には合計19の農場が存在することになった。これらの農場により開墾された土地は19万9662畝であった。[28]

国营牧場としては、1952年に建設された巨流牧場、シリングル牧場など16の牧場を挙げることができる。国营牧場は、その後農場と同様に第1次五ヵ年計画の期間に多数つくられ、その数は38になった。これらの牧場でも「農業を兼営する」という方針のもとで大規模に放牧地が開墾され、放牧地の面積は46万1587.5畝となった。[29]

「大躍進」運動の中で、国营農場・国营牧場の数が増加するとともに、開墾も一層加速した。57であった国营農場・国营牧場（1957年）が、1958年には76に増え、さらに1960年末には100に至った。そして、1958～60年の間の開墾地は535.05万畝に達した。[30]

3. 中央農墾部による開墾の事例

1960年、中央の農墾部直属の黒竜江省牡丹江開墾区で冠水被害が発生し、開墾作業が続けられなくなった。そのため、中央農墾部は、この直属墾区の開墾に携わっていた3500名の開墾者と幹部をフルンボイル盟へ派遣し、296万畝の草原を開墾させた。さらに、1961年、1962年、1963年にも同様にそれぞれ56万7000畝、13万8000畝、256万426畝の草原が開墾された。[31]

4. 破壊的な開墾の事例

上で述べたような開墾において、開墾された草原の多くは放牧地としてもっとも優良な土地であったことが、1963年4月4日の内モンゴル党委の中央への報告から確認できる。[32] こういった優良放牧地を開墾すること自体が草原の破壊であるが、さらに指摘しなければならないのは、耕作に全く適さない、しかも周辺地域の自然環境に悪影響を及ぼす土地まで開墾してしまうという深刻な事態が発生したことである。事例をあげれば、フルンボイル牧畜業4旗において開墾された239万畝には、耕作に適さない砂地が39万畝以上、開墾すれば牧畜業に重大な悪影響がもたらされる土地が184万畝含まれていた。すなわち、この184万畝のうち、34万畝は家畜が牧地や水場へ移動するための道で、145万畝は放牧場や草刈場、5万畝は、家畜の塩分補給に必要なアルカリ性土壌の土地であった。[32] また、イフジョー盟を例にすれば、砂漠化防止を目的として烏蘭布和砂漠周辺につくられていた「育草地」も「砂漠を畑に」（「沙漠変農田」）という名目で190万畝開墾されてしまった。[33]

開墾がもっとも盛んにおこなわれた1960年には15万人が動員され、6月14日の時点で、開墾地は673万畝であったが[34]、年末には開墾面積は1600万畝にも至った。[35]

上で述べたように、「大躍進」期の内モンゴルにおける開墾は、中央農墾部による直接の開墾と国家経営の農牧場における開墾の形がとられ、しかも、農業地域と牧畜業地域を区別することなく、土地が農業に適するかどうか問われることなく一律におこなわれたのである。開墾され

た土地の規模は中華人民共和国建国からそれまでの期間で最大であった。

このような土地開墾の問題は以下のような結果をもたらした。

第一に、穀物増産という目的とは正反対に、穀物の生産量が減少の一途をたどる結果になった。1958～62年の4年間に穀物の生産量は連続して減産し、48.3億kg（1958年）から32.6億kg（1962年）になり、15.7億kg（32.5%）も減少した。[\[36\]](#)これが、「大躍進」運動における過度の開墾のもたらした一つ目の結果である。

第二に、開墾による草原の破壊である。開墾してはならない草原までが開墾され、生態系が甚だしく破壊されたため、草原の砂地化が生じた。すなわち、「一年目に草原が開墾され、二年目に穀物が少々収穫され、三年目に砂地になる」（「一年開草場、二年打点粮、三年变沙梁」）、「農業が牧畜業を侵食し、砂が農業を破壊してしまう」（「農業吃掉牧業、沙子吃掉農業」）という悪循環になってしまった。[\[37\]](#)「大躍進」当時、イフジョー盟党委の書記をつとめていたボインバト氏の証言によれば、イフジョー盟の開墾された放牧地のほとんどで耕作ができたのは最初の1年だけで、はやくも2年目には砂地化してしまったという。[\[38\]](#)このように、開墾された土地の30%が耕作には適さない草原であったので、放牧地が破壊されたばかりでなく、砂漠化も始まった。そしてその開墾された草原では農業も牧畜業もいとなむことができなくなってしまった。[\[39\]](#)

内モンゴルにおいて砂漠化した面積は、1960年代の3.4億畝から1980年代には4.5億畝にまで至った。ホルチン左翼後旗を例にすれば、砂漠化した面積は1956年の18万畝から1979年には180畝に増加した。このような砂漠化した土地は、いまや内モンゴルの総面積の16%を占め、自治区全体の90の旗・県のうちの66の旗・県にまで拡大しているという。[\[40\]](#)砂漠化と「大躍進」における過度の開墾、そしてその後の「文化大革命」期（1966～1976年）におこなわれた放牧地開墾③との関連は否定できないであろう。

第三に、草原は牧民にとっていうまでもなく重要な生産手段である。過度な放牧地開墾による草原破壊の結果、放牧に利用できる草原の面積が縮小されていった。フルンボイル盟のホーチンバルガ旗、エヴェンキ族自治旗を例にすれば、家畜1頭あたりの放牧用の草原面積は1952年にそれぞれ529.5畝、43畝であったのに対し、1961年には244.6畝、19.7畝になり、それぞれ53.8%、77.4%減少した。[\[41\]](#)このように、生産手段である放牧地が失われていくことにより、牧畜業生産は日増しに衰退した。内モンゴル全体で、牧民の一人あたりの年間収入は、1957年の510元から1962年には278元にまで減少した。[\[42\]](#)すなわち、1957年から1962年の間に牧民の年間収入は45.5%減ったことになる。

上述のような土地開墾の問題は内モンゴルにとどまることなく、ほかの非漢人地域でも生じた。新疆ウイグル自治区を例にすれば、新疆生産建設兵団のかたちで20余りの農場が設立され、「大躍進」時期に開墾された土地は、1957年時点で320万畝であったのが、1961年時点で800万畝に至った。[\[43\]](#)

1950年代末から1960年代初めにかけて、河北省、山東省などの地域の数多くの農村人口は内モンゴルへ移入した。その特徴は、①規模的にみると、辺境少数民族地域のなかで流入人口は最も大きかった；②移出元の地域別にみると、河北省の移入の人口が最多だった；③時間的にみると、1960年が移入人口のピークだった；④人口構造からみると、一部の地域においては移入人口はすでに地域総人口の相当の割合を占めるようになった；⑤移入類型からみると、過剰労働力が大多数を占め、その次は家族全員または家族の半分の構成員だった。

自流移民の内モンゴルへの移入には、いくつかの原因があった。外的原因からみると、自流移民の移出元の地域は自然災害の被害を受け、生産や生活は困難な状況に陥った。内的原因から

みると、内モンゴルにも自然災害は発生したものの、ほかの地域のような深刻なものではなかったうえ、ほかの地域への食糧などの支援、援助もおこなっていた。歴史的要因からみると、近代以降、内地の農民は「走西口」「闖關東」などのかたちで内モンゴルへ移入してきた「前史」があった。客観的要因からみると、自流移民の移出元の地域においては、耕地は少なく、労働力は過剰だった。

自流移民の内モンゴルへ移入した動機は、本人とその家族の生産と生活を維持するためであったり、よりよい職に就くためであったり、お金を儲けるためであったりなどの理由であった。また、自流移民の中には、食糧の義務供出制度と協同組合化の活動に不満であったり、移出元の生産と生活に満足せず、内モンゴルへ行き、豊かになるという考えを持っていた。

内モンゴルの各級党委と政府は、自流移民の生産と生活状況を把握したうえ、自流移民を人民公社に加入させるか、生産基盤や生活必需品の支援と援助をおこなった。また、自流移民を安置する過程において民族政策も貫徹され、民族間の団結も達成された。

自流移民の内モンゴルへの移入により、自流移民の自然死でない死亡事件、強盗事件などのさまざまな問題が発生し、内モンゴル地域社会の秩序と人民大衆の生活や生産に悪影響をもたらした。さらに、自流移民の移入、とくに「大躍進」運動の期間に内モンゴルの人口増加は急激なものとなり、内モンゴル現代史上、頂点に達した。増加した人口の絶対多数は漢人地域からの移入民であり、かれらの半数を農業従事者が占めていたため、農業人口が異常に増えた。特に、牧畜業地域の場合はその度合いがもっとも著しかった。これらの漢人農民が耕地を必要としたことが、過度の放牧地開墾を促す要因として働き、大量の放牧地が開墾された。しかし、放牧地開墾の結果は、穀物を増産できなかっただけでなく、自然環境は破壊され、草原が砂漠化され、放牧地が縮小された。他方では、牧畜業地域の食料供給の負担を増大させた。また、移住民に対する支援策として、もともとその地域に住んでいた牧民の生活・生産基盤や用具を平均的に分配したことが牧民の生活と生産に与えた影響は決して少なくなかった。

注釈

① “走西口”とは、中原地域（中国黄河中流から下流にかけての漢人居住地域を指す）の漢人農民が万里の長城の殺虎口などの諸関を越え、長城北側の包頭など内モンゴル西部地域へ行くことを指す。“闖關東”とは、^②中原地域の漢人農民が古北口、山海関などの要塞を越え、内モンゴル東部地域や東北地域に行くことを指す。

② “大躍進”運動期における飢餓や栄養失調による非正常死亡者数については 2000 万人（丁抒（森幹夫訳）『人禍 餓死者 2000 万人の狂気（1959～1962）』学陽書房、1991 年、3 頁；蘇曉康・羅時叙・陳政共著『廬山會議：中国の運命を定めた日』、毎日新聞社、1992 年、490 頁）であったとも 3000 万人（ベッカー・ジャスパー（川勝貴美訳）『^{ハンクリー・ゴースト} 餓鬼：秘密にされた毛沢東中国の飢饉』中央公論新社、1999 年、3 頁）、4000 万人（叢進『曲折発展の歲月』河南人民出版社、1989 年、272-273 頁）であったとも言われている。

③ “文化大革命”の期間において、“牧民不吃亏心糧”のスローガンのもとでの放牧地開墾と 10 万人にのぼる「内蒙古军区生産建設兵団」（1966 年 5 月 1 日設立）による開墾がおこなわれ、中華人民共和国建国以降第二回目の大規模の放牧地開墾運動の高まりが訪れた。“文化大革命”の 10 年間に開墾された放牧地の面積は 5442 万畝に至り、当時の内モンゴル自治区の牧畜業地域の草原面積の 10 分の 1 を占めた（前掲『内蒙古民族問題研究』191 頁）。

参考文献

- [1] 趙入坤. 二十世紀五六十年代中國邊疆移民[J]. 中共黨史研究, 2012, (2): 52-64.
- [2] 內部務黨組. 關於農村人口外流問題的報告[M]. 1959年2月7日, 內蒙古檔案館 255-2-49.
- [3] 勞働部黨組的報告[M]. 1960年5月4日, 內蒙古檔案館 255-2-53.
- [4] 中國共產黨內蒙古哲盟通遼市委員會. 關於安置流入我盟農民補充指示[M]. 1955年7月26日, 內蒙古檔案館 255-2-8.
- [5] 中共喜貴圖旗委員會. 關於對盲目流入城市的農民的處理與安置工作情況的報告[M]. 1955年8月15日, 內蒙古檔案館 255-2-8.
- [6] 中國共產黨內蒙古東部委員會. 關於安置移民工作的報告[M]. 1955年10月5日, 內蒙古檔案館 255-2-8.
- [7] 宋迺工主編. 中國人口——內蒙古分冊[M]. 北京: 中國財政經濟出版社, 1987. 174.
- [8] 內蒙古黨委關於開展清理區外流入人員工作的指示[M]. 1960年7月21日) 內蒙古檔案館 255-2-53; 內蒙古黨委. 關於內地勞働力流入內蒙古情況的報告[M]. 1959年3月31日, 內蒙古檔案館 255-2-25; 前揭. 中國人口——內蒙古分冊[M]. 176頁.
- [9] 中共巴彥淖爾盟委. 關於甘肅省勤民等地自由流入我盟人員情況和處理意見的報告[M]. 1961年1月19日, 內蒙古檔案館 255-2-79; 中共昭烏達盟委. 關於外地自由流入人口情況的報告[M]. 1961年3月30日) 內蒙古檔案館 255-2-79; 中共哲里木盟委「關於我盟當前人口流入和今後意見的報告, 1961年3月30日, 內蒙古檔案館 255-2-79. \
- [10] 山西省忻縣專區內蒙古工作組. 關於前往內蒙古農民訪問安置農民工作的報告[M]. 1955年8月3日, 內蒙古檔案館 255-2-8.
- [11] 王鐸. 當代內蒙古簡史[M]. 北京: 當代中國出版社, 1998. 176-177.
- [12] 中共喜貴圖旗委員會. 關於對盲目流入城市的農民的處理與安置工作情況的報告[M]. 1955年8月15日, 內蒙古檔案館 255-2-8.
- [13] 中共昭烏達盟委員會. 關於從外地自由流入人口情況的報告[M]. 1961年3月30日, 內蒙古檔案.
- [14] 中國共產黨內蒙古哲盟通遼市委員會. 關於安置流入我盟農民補充指示[M]. 1955年7月26日, 內蒙古檔案館 255-2-8.
- [15] 公安部, 內務部黨組. 關於堅持制止人口自由流動向中央的報告[M]. 1961年10月14日, 內蒙古檔案館 255-2-79.
- [16] 內蒙古黨委. 關於嚴防自由流入人員和城鄉人民群眾凍餓等非正常死亡事件發生的通報[M]. 1961年1月14日, 內蒙古檔案館 255-2-79.
- [17] 中共哲里木盟委員會. 關於我盟當前人口流入情況和今後意見的報告[M]. 1961年5月30日, 內蒙古檔案館 255-2-79.
- [19] 內蒙古黨委關於開展清理區外人員工作的指示[M]. 1960年7月21日, 內蒙古檔案館 255-2-53.
- [20] 前揭. 中國人口——內蒙古分冊[M]. 63-71頁.
- [21] 加々美光行. 中國の民族問題: 危機の本質[M]. 東京: 岩波書店, 2008. 150.

- [21] 前掲. 中国人口——内蒙古分冊[M]. 174-176.
- [22] 内蒙古自治区畜牧业厅修志編史委员会編著. 内蒙古畜牧业發展史[M]. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社, 2000. 155.
- [23] 中共内蒙古自治区党委党史研究室編. 六十年代国民經济調整[M]. 中共党史出版社, 2001. 78.
- [24] 内蒙古統計局. 奮進的内蒙古(1947~1987) [M]. 北京: 中国統計出版社, 1989. 279.
- [25] 内蒙古党委政策研究室·内蒙古自治区農業委员会編印. 内蒙古畜牧业文献資料選編[M]. 第二卷〈下〉, 1987. 79.
- [26] 斯日古楞. 内蒙古民族問題研究与探究[M]. 呼和浩特: 内蒙古教育出版社, 1993. 183.
- [27] 斯日古楞. 内蒙古民族問題研究与探究[M]. 呼和浩特: 内蒙古教育出版社, 1993. 159.
- [28] 菅光耀・李曉峰主編. 穿越風沙線[M]. 北京: 中国档案出版社, 2001. 145-147.
- [29] 菅光耀・李曉峰主編. 穿越風沙線[M]. 北京: 中国档案出版社, 2001. 141-148.
- [30] 前掲. 六十年代国民經济調整[M]. 82 頁.
- [31] 前掲. 穿越風沙線[M]. 150 頁.
- [32] 内蒙古党委政策研究室·内蒙古自治区農業委员会編印. 内蒙古畜牧业文献資料選編[M]. 第一卷, 1987. 132.
- [33] 前掲. 穿越風沙線[M]. 143 頁.
- [34] 人民日報[M]. 1960 年 6 月 14 日.
- [35] 前掲. 穿越風沙線[M]. 142 頁.
- [36] 前掲. 当代内蒙古簡史[M]. 176-177; 郝維民, 齊木德道尔吉主編. 内蒙古通史綱要[M]. 北京: 人民出版社, 2006. 590.
- [37] 閻天靈. 漢族移民与近代内蒙古社会变遷研究[M]. 北京: 民族出版社、2004. 424-425.
- [38] 肖瑞玲等. 明清内蒙古西部地区開發与土地沙化[M]. 北京: 中華書局、2006. 241.
- [39] 前掲. 内蒙古畜牧业文献資料選編[M]. 第二卷〈下〉、79 頁.
- [40] 前掲. 漢族移民与近代内蒙古社会变遷研究[M]. 420-421 頁.
- [41] 前掲. 内蒙古民族問題研究与探究[M]. 159-160 頁.
- [42] 内蒙古畜牧业文献資料選編[M]. 〈下〉、32-33 頁.
- [43] 中国の民族問題: 危機の本質[M]. 50 頁.

The Issue of Inner Mongolia Automatic Immigration in 1950s-1960s

Renqin

(Center for Mongolia Studies of Inner Mongolia University, Hohhot, 010021)

Abstract: In the mid 1950s to the beginning of 1960s, it came forth a phenomenon which has large mount of rural population emigrated automatically in Hebei、Shandong, the most of the spillover emigrated to those border minority areas, such as Xinjiang、Qinghai and Inner Mongolia. It has long history that mainland population emigrate to the border minority areas which makes it become an important matter of historical and population research, but also become a significant issue and one of the research field in the contemporary Chinese history and especially in the study of contemporary Chinese minorities history. However, so far, it has few related works. Inner Mongolia is taken as research object area in this paper, and mainly with making use of related archives and historical document which stored in Inner Mongolia Archives to talk about the issue of Inner Mongolia automatic immigration in the mid 1950s to the beginning of 1960s in order to make up for the blank. The article attempts to give answer for following several questions: (1) what kinds of feature exist in the Inner Mongolia automatic immigration? (2) What makes automatic immigration immigrate to Inner Mongolia? (3) What kind of motivation、mind reaction and attitude do the automatic immigration have when they immigrate to Inner Mongolia? (4) How's the installed situation of automatic immigration? (5) What kind of social matters come appear because of immigration of automatic immigration and what kind of effect brought by those matters?

Key Words: 1950s-1960s; Inner Mongolia; Automatic Immigration

收稿日期: 2016-04-16;

作者简介: 仁钦 (1963-), 男, 蒙古族, 内蒙古兴安盟人。内蒙古历史学博士, 内蒙古大学蒙古学中心副研究员, 主要从事蒙古史研究。